

Knowledge Report

IX Knowledge Inc. PR MAGAZINE
Vol.50 AUTUMN 2025



アイエックス・ナレッジ株式会社

- ❶ 犬飼博文新社長からのご挨拶
社会とITの未来をともにつなぐ
- ❸ あすへの対談 安藤会長が聞く！
“through responsible innovation”
豊かで調和のとれた社会の実現に向け
ITで新たなしくみや価値を創造する
ゲスト：佐々木 裕さん
株式会社NTTデータグループ 代表取締役社長 CEO
- ❪ [特別企画] ブレイクタイム
江戸湾をめぐる戦国絵巻
～海城にいざ、出陣！～
山城ガールむつみ氏

- ❶ わが社の匠
トップ・エンジニアの軌跡❸
秋山 真太郎
- ❶ [特別インタビュー企画]
芝浦アイランド児童高齢者交流プラザ
世代を超えた交流と心地良い居場所を提供する
- ❶ [コラム]
7万年のものさし

[今号の表紙]

記念すべき創刊50号を迎えた「IKI ナレッジ・レポート」の表紙を飾るのは、今年6月、24年ぶりのトップ交代で代表取締役社長を引き継いだ犬飼博文氏(右)と代表取締役会長に就任した安藤文男氏(左)の2ショットです。この新体制のもと、アイエックス・ナレッジはグループ一丸となって新たな一歩を踏み出します。

IKI ナレッジ・レポート vol. 50

令和7年10月1日発行

編集：アイエックス・ナレッジ株式会社

〒108-0022 東京都港区海岸3-22-23 MSCセンタービル

TEL.03-6400-7000(代) URL <https://www.ikic.co.jp>

本文中に掲載されている商品名およびサービス名は各社の商標または登録商標です。
本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

社会とITの未来を ともにつなぐ

この度、代表取締役社長に就任いたしました、犬飼博文でございます。

私は、1987年の入社以来38年間、技術者としてまた経営を担う者としてアイエックス・ナレッジとともに歩んでまいりました。社長という重責に身が引き締まる思いですが、当社グループのさらなる成長と発展を実現していく所存です。当社グループは長年の事業活動で培ってきた業務知識、技術力、そして社員の人間力といった「強み」を武器に、お客様の課題解決に取り組みながら、お客様のIT基盤の構築・整備をお手伝いしてまいりました。

いま、わが情報サービス業界には、急激に変化する社会への対応とともに、クラウドやAIなど急速に進化するデジタル技術への対応が求められています。

こうした状況において当社グループは、グループパーパス「社会とITの未来をともにつなぐ」のもと、「中核事業の拡大」「次期成長事業の創出」「事業基盤の強化」を中期経営方針の3本柱として掲げ、財務・非財務の戦略を一元化したサステナビリテイ経営を推進してまいります。さらに、社員一人ひとりが自らの「強み」を磨き、新たな技術にチャレンジし続け

れる環境づくりを進め、全社一丸となってケイパビリテイの拡大に取り組むことで、多様化するお客様のニーズに対応してまいります。

今後とも一層のご支援とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

代表取締役社長

犬飼 博文

Profile

1968年生まれ、岡山県出身。1987年(株)アイエックス(現 アイエックス・ナレッジ)に入社し、技術者として組み込み系開発に従事。事業部門担当執行役員、事業部門・営業部門担当取締役を歴任後、代表取締役副社長を経て、2025年6月代表取締役社長に就任。

犬飼新社長に二問一答！

Q1 座右の銘を教えてください。

A1 「みんながハッピー」

社員とその家族のみんながハッピーでないと、仕事はうまくいかないと思っています。「みんながハッピーになるように」という願いも込めて、この言葉を大切にしています。

Q2 技術者として案件に携わっていた頃はどのような業務をしていましたか？

A2 組み込み系のシステム開発

入社後の配属からお客様の現場に常駐し、コンピューターの記憶装置を制御するプログラムの開発に携わりました。若手の頃は磁気テープ※装置の制御プログラムを開発していましたが、記憶装置の進化に伴ってストレージの制御プログラムへ。いわゆる組み込み系のシステム開発に長く携わりました。

そのお客様にはとてもお世話になり、技術者としてのスキルやノウハウを多く学びました。

※磁気テープ：磁性体を塗布したテープ状のフィルムを用いた記憶媒体

Q3 仕事をする上で大切にしていることはありますか？

A3 朝の時間が一日を変える

先ほどお話しした現場のお客様に、毎朝早くに出社される方がいらつやいました。ある時、どうしてそんなに早く出社されるのか尋ねたところ、朝の時間の使い方で一日の働き方が変わるのだと教えていただきました。その方は、始業前にその日のタスクを確認し優先順位を付け、一日のスケジュールを立てていました。始業直前に出社して急いで準備するよりも、余裕を持って出社することで始業後すぐに業務に取り掛かることができ、効率よく作業を進めることができると。以来、私も自分なりの朝の時間の使い方を意識することを心掛け、一日の働き方を考えるようにしています。

安藤会長が聞く！

“through responsible innovation”



豊かで調和のとれた社会の実現に向け ITで新たなしくみや価値を創造する

豊かで調和のとれた社会づくりをめざし、50以上の国と地域でITサービスを提供する株式会社NTTデータグループ。ITサービス市場売上高ランキング^{※1}では世界8位、国内1位に位置するなど国内外で躍進し続けている。2025年5月にはグローバル・ソリューション事業における中心的な役割を担うものとして、NTTグループの完全子会社への移行を発表。国内外約20万人の社員を率い、さらなる企業価値向上をめざす同社代表取締役社長 CEO 佐々木裕さんに、安藤会長がお話を伺いました。

株式会社NTTデータグループ
代表取締役社長 CEO

佐々木裕

Yutaka Sasaki

安藤文男

Fumio Ando

2021年～2022年 海外事業の統合に奔走

安藤…本日はお越しいただきましてありがとうございます。最初に、佐々木社長のご略歴をお聞かせください。

佐々木…私は1990年にエヌ・ティ・ティ・データ通信株式会社（現 株式会社NTTデータグループ）に入社して、今年度で35年目に入ります。プロジェクトマネージャーとしてさまざまなシステム開発に携わる時期が長くありまして、IKIさんとは若い頃にアプリケーション開発やその更改プロジェクトなどで一緒に働いていたいただきました。当時は大変お世話になりました（笑）。

その後、2016年に執行役員 ビジネスソリューション事業本部長に就任しました。IT業界は特定の業種ごとに部署を分けるインダストリーカットの組織と、提供サービスごとに部署を分けるソリューションカットの組織が多いのですが、ビジネスソリューション事業本部は後者ですね。当時はグローバルでクラウドのビジネスをどうやって伸ばしていくのか、また、生成AIのマーケットでどうビジネス展開をしていくのかといったことに注力していました。こういったことを考えるのはとても新鮮で、非常に良い経験をさせていただきました。そして、2020年に常務執行役員、2021年

にコーポレート統括本部長に就任しました。

2021～2022年は当社にとって是非常に大きな転機で、海外データセンタ事業の流れを汲むNTT Ltd.（以下、リミテッド）という会社とNTT株式会社（以下、NTT）がそれぞれ担っていた海外事業を当社に統合しました。私はコーポレート統括本部長としてこの統合を推進していましたが、結構大変な交渉事でした。その流れで国内事業会社の株式会社NTTデータ、海外事業会社のNTT DATA, Inc.、それらを統括する持株会社のNTTデータグループの3社体制への移行も行い、2023年にNTTデータの社長に、そして昨年度からNTTデータグループの社長に就任しました。

2025年は 「AIIエージェント元年」

安藤…DXから始まって、いま生成AI、AIIエージェントなどが話題になっていますが、NTTデータグループ全体としてどのような方向感を持たれていらっしゃいますか。

佐々木…リミテッドを統合したことによってスケールを獲得でき、ITサービス市場売上高ランキング^{※1}においてグローバルトップ10に入らせていただいた

ことは非常に意義がありました。トップ10に入るとビッグテックといわれているマイクロソフトやグーグル、アマゾン、セールスフォースともパートナーとして会話できますし、さまざまな形でライアンスが組めるのは当社のステッとして非常に大きかったと思います。ここ10年くらい、そういったプレイヤー抜きにはITサービスを提供できなくなってきましたので、ビッグテックあるいはそれに続く企業についてもしっかりとウォッチしながら、彼らとどのようなライアンスを組んでお客様に価値を提供できるかを常に考えています。

その流れの一つとして、この4月にOpenAIとの提携を発表させていただきました。業界としてこれからどうAIに取り組んでいくのかというのは、日本のみならずグローバルにおいても非常に重要なテーマだと思っております。マーケットでどうイニシアチブをとれるかが、今の私の大きな関心事ですね。

安藤…AIの活用は全産業で必要になりますから、どのようなプレイヤーとしてやっていくのかというのはわれわれの非常に重要なテーマになってきます。

佐々木…昨年くらいまで生成AIのChatGPT^{※2}が非常に普及して個人の生産性を高めることにはかなり寄与してきましたが、企業のP/L（損益計算書）に大きく寄与するほどではありませんでした。しかし、AIIエージェント



株式会社NTTデータグループ 代表取締役社長 CEO

佐々木 裕 Yutaka Sasaki

1990年エヌ・ティ・ティ・データ通信株式会社（現 株式会社NTTデータグループ）に入社。2016年執行役員に就任。業界横断で活用できるITソリューションの開発やサービス提供を担う事業に従事した後、製造業のお客様の事業変革をサポートする事業の拡大に取り組んだ。2020年に常務執行役員に就任。2021年からは、のべ3年にわたるNTTデータの持株会社体制への移行、それにとまなう海外事業会社の統合と国内事業会社の設立をリードした。2023年、設立した国内事業会社（株式会社NTTデータ）の代表取締役社長に就任するとともに、持株会社であるNTTデータグループの代表取締役副社長に就任。2024年6月よりNTTデータグループの代表取締役社長に就任し、NTTデータ（国内事業会社）とNTTデータグループ（持株会社）の2社の代表取締役社長を務める。2025年6月にNTTデータの代表取締役社長を鈴木正範に引き継ぎ、NTTデータグループの代表取締役社長に専念。東京都生まれ 東京大学大学院工学研究科卒業



- Mission**
Accelerate client success and positively impact society through responsible innovation.
情報技術で、新しい「しくみ」や「価値」を創造し、より豊かで調和のとれた社会の実現に貢献する。
- Values**
 - Respect every voice.
 - Think big. Be bold.
 - Deliver the outcome.
 - Win together.
- Code of Business Ethics**
私たちが、倫理的かつ法的に適切に、他者や社会に敬意をもって行動することを定めたもの。責任ある事業活動のよりどころ。

な会社に入社したと思っていましたので、50歳を過ぎてから英語を使わざるを得ないようなケースが増え、いろいろな苦労しながらやっています。

社長の役割の一つとして、会社という船に乗る社員の皆さんに同じ方向を向いてもらう必要があります。20万人がバラバラに動いていたらきちんとした価値を作り込めません。最近は私も海外に行ってタウンホールミーティングで社員と対話する機会が増えてきています。それでも一握りの社員としか対話ができないので、できるだけ多くの方と対話できるようにこれからも続けていきたいと考えています。

また、国内の中途採用も増えてきましたし、海外はもっと流動性が高いんですね。そうすると新たに仲間になってくれた人に、どのような会社なのか、どのような価値を大事にしているのか、ということも分かってもらうためのツールは非常に大事です。そのような問題意識から、7月に当社がめざす方向について記した「Our Way」を刷新し、「Respect every voice」「Think big. Be bold」「Deliver the outcome」「Win together.」という4つの「Values」を定めました。会社としての価値を共有するために、この新たな「Values」を社員に浸透させようとしています。

安藤…ますます競争が激しくなる中で、「人財」という面では何か変わってきていますか。

佐々木…ここ数年で経験者採用を採用全体の3割くらいまで増やしてきています。経験者採用を増やして良かったのは、カルチャーに多様性が出ることでですね。また、専門性の高い社員を採用できるというのは当社にとって、組織力をエンパワールするという意味では大変有効に機能していると思います。

それから、シニア層も貴重な人財です。メインフレームの経験やお客様の業務知識が豊富という観点からも非常に大事になってきています。もちろん会社なので若手を登用していく中でシニア層がリタイアできる制度もあります。ただ、シニア層の力は貴重です。それをきちんとお伝えする必要がありますし、価値に応じた報酬を得ていただくための仕組みを会社として整える必要があると思っています。

先ほどカルチャーの話をしました。当社としての画一的な文化があるわけではありません。私どものビジネスはやはりお客様に鍛えていただくケースが多いんですね。さまざまなお客様に鍛えていただいてそれぞれが育っていますから、カルチャーも一元的ではなくてかなりバ

リエティーに富んでいます。もちろん開発のやり方や品質の作りこみ方についてはNTTデータ流という様式は持っていますけれども、人それぞれという意味での多様性はこれからでもできるだけ維持していきたいと思っています。

安藤…先ほど、海外でデータセンター事業を展開されているリミテッドとの統合のお話がありました。海外事業について現状はいかがですか。

佐々木…リミテッドが傘下に入りスケールを獲得したことで、今、社員が約20万人います。そのうち15万人が外国人です。その15万人の中にはスペイン人もいればブラジル人やインド人もいます。現在50以上の国と地域でビジネスをさせていただいていますが、私はドメスティック

世界中の仲間に向けた4つの「Values」

を企業が活用し始めると、おそらくですが個人もさることながら組織の生産性がダイナミックに改善する可能性が出てくると思います。そういった意味で2025年は「AIエージェント元年」と、私は呼んでいます。かなりいろいろな動きが始まるであろう年になると思っています。

一方、グローバルでわれわれの競争を見ると、コンサルティングファームやインド系のIT企業などさまざまなプレイヤーがわれわれの主戦場であるITサービスの領域に参入してきています。国内メーカーもハードからサービスへとシフトしてきていますし、非常に競争が激しくなっていると認識しています。



安藤 文男 Fumio Ando

アイエックス・ナレッジ株式会社 代表取締役会長

プログラムが1行間違っているというのがある。最終的には徹底的に試験をします。ミッションクリティカルなシステムであればあるほど入力との相関チェックなど、より徹底的な試験が必要になります。この徹底的な曖昧性の排除というのが生成AIはそれほど得意ではないと思っていますから、全てが生成AIに置き換わることにはならないと思います。もちろん一定程度の生産性の改善はあると思いますが、そういった領域のソフトウェアについてはやはり人が最後のゴールまできちんと押さえていく必要があります。

安藤.. 最初と最後は人がきちんとチェックしないといけませんね。

佐々木.. そうですね。人としての役割は確実に残ってくると思います。一方で心配なのは、生成AIが普及することで人のトレーニングというプロセスが抜け落ちるリスクがあることです。以前、生成AIが出てきて自分が若手時代にやっていた調査のプロセスが要らなくなったと言っていたコンサルタントの方がいました。「俺の若手時代は何だったんだ？」と。けれども試行錯誤しながら調査して、それらを論理的に整理して：というプロセスがあったから優秀なコンサルタントになれたわけです。プログラミングの世界でも同様に、生成AIが書いたプログラムを人がきちんとレビューしないといけません。

ん。プログラムを書いたことがあるから、きちんとレビューもできるんです。人の能力をどのようなプロセスで高めていくのかをセットで考えていかないと、生成AIを100%活用できるところまで行き着かないと思います。

先ほどお話しした「Value」の作成と共に、私どもはミッションの英語版もアップデートさせていただきました。「Accelerate client success and positively impact society through responsible innovation」情報技術で、新しい「しくみ」や「価値」を創造し、より豊かで調和のとれた社会の実現に貢献する。最後の「responsible innovation」が非常に好きな言葉なのですが、テクノロジーはやはり責任を持つお客様に価値をお届けするということが必要です。それができて初めてイノベーションになる。生成AIでいろいろなお客様の業務が改善されたり改革されたりする中で、そこに対して品質をいかに担保していくかというあたりはやはり専門家の責任という役割だと思っています。これはグローバルでも日本でもITサービスにおいてより一層求められる能力だと思いますので、ぜひそのあたりはIKIさんにも一緒にやっていただきたいと思います。

安藤.. 今まで以上によろしくお願いいたします。

社長と社員との対話イベント「YUTAKAと語ろう」

NTTデータグループでは社員のエンゲージメントの維持・向上とより良い職場づくりに取り組んでいますが、2023年に国内事業会社の社長に就任してから「YUTAKAと語ろう」というコミュニティミーティングを開催しています。これは社長と社員との対話イベントで、私が国内会社の社長に着任してから計40回くらい続けています。

イベントの内容や集まる社員は回によってさまざまですが、たとえばテーマ編といって「サステナビリティについて語ろう」「イノベーションについて語ろう」と設定したテーマに対して、挙手制で集まってくれるケースもあります。最近開催した職場訪問編ではNTTデータの各本部だけでなく、グループ会社にも訪問させてもらっています。先日はNTTデータ東北へ行ってきました。だいたい一回20名前後なのですが、私にとって非常に良いのは社員の生の声を聴けることです。また、「会社のホームページでしか見たことがないけど社長ってこういう人なんだ」と、社員に私のパーソナリティを理解してもらえる非常に良い機会にもなっています。社員に楽しんでもらえる環境を作り、同じ方向を向いてもらうというのが私の仕事だと思っています。(佐々木社長)



生成AIを
100%活用するために

安藤.. 先ほど2025年は「AIエリート元年」というお話がありましたが、将来的に夢が広がる半面、どうしたらいいのというところもあつて今は悩ましい時期にいる感じがしています。

佐々木.. 生成AIがこの産業をどう変えていくかという意味では難しさも非常にあると思います。プログラミングの人材が要らなくなるといった話もありますね。先日、社内で生成AIのデモを見せてもらいましたが、10行くらい仕様を書くだけで3分後くらいには1キロステップのソースコードがアウトプットされてくる。普通は1キロステップを作るのに1人月とか、そのような単位で考えますよね(笑)。仕様通りに完全に動くプログラムではないものの、たたき台となるプログラムが数分でできるというのは改善という言葉では言い表せなくて、すさまじい生産性の飛躍です。

ただ一方で最近申し上げているのは、生成AIはもつともらしいアウトプットを出すのは得意です。それがだいたい研ぎ澄まされてきて、あたかも人が書いたと思わせるアウトプットになっています。ですが、システム開発では徹底的に曖昧性を排除しているんです。

NTTデータグループのMission

情報技術で、新しい「しくみ」や「価値」を創造し、より豊かで調和のとれた社会の実現に貢献する。

Accelerate client success and positively impact society through responsible innovation.

面白い時代を社員が
楽しんでいける会社に

安藤.. 今、品質についてのお話がありました。御社がめざす姿としての「Quality Growth(質を伴った成長)」に込められた思いをお聞かせください。

佐々木.. 昨年の7月に、海外も含めたリーダーたちを150名くらい集め、グローバルカンファレンスという社内



ミーティングイベントをロンドンで開催しました。そのときのキーワードが「Quality Growth」でした。今、会社全体で「Quality Growth」を実現していると言っています。ITサービスのビジネス自体が非常に成長していますが、単なる成長を実現するのではなくて、質を伴った成長を作っていく必要があると。質というのは財務の観点から言うと、やはり利益ですね。当然ですが、高い価値を提供していかないと利益は出てこないわけです。お客様に提供する価値をいかに最大化していくか。その結果として質を伴った成長を実現したいと考えています。

実は、日本に本社を持つグローバル企業としての当社に、「Quality」というキーワードはとてもフィットするんです。日本のお客様の要求水準は極めて高いですから、海外の当社の社員から見てもあるいはお客様から見ても、やはり「Quality」をきちんとお届けするということが当社にとって非常に重要なキーワードであると思っています。

安藤…クオリティにおいて日本は世界のトップクラスだと思いますが、スピードではどうしても出遅れてしまいます。

佐々木…確かに、新しいものにチャレンジするという意味では、日本はグローバルより少し遅れる傾向がありますが、ITを専門とする企業としては、常

にアンテナを高くして、製品自体、プロダクト自体あるいはクラウドのサービス自体を先んじて評価していくことが大事になってきています。われわれがお客様に先んじてご提案できることが重要ですね。

安藤…「Quality Growth」は大変良いキーワードですね。これは、佐々木社長が出されているコメントの「面白い時代を社員一人ひとりが楽しんでいける会社にしたい」ということと繋がってきますか。

佐々木…そうですね。ITを中心としたテクノロジーが、世の中の変革を支えたりリードしたりできる時代になってきていると思います。近年、「ソフトウェア・デファインド」という言葉が使われ始め、これまでハードウェアを中心に動いていたものがソフトウェアでフレキシブルに動かせる時代になってきています。今まではいわれたソフトウェアを作る時代でしたが、ソフトウェアをこんな構成でこのように組み込むとこんなメリットがありますと、お客様のパートナーとなって議論できるし提案もできる社会になってきたと思います。いわれたものをきちんと作る能力も当然大事ではありますが、技術者個人がその先を発想できる時代にもなってきました。一人ひとりが豊かな発想力を持って新しい価値を作れる時代を社員一人ひとりが楽しめるよ

を実装するという側面では、品質を保証しつつ、責任を持つてお届けする必要があるなってきますから、IKIさんのようなパートナー企業の皆様と役割分担をしながらどのように社会実装していくのかも検討していきたいと思っています。

安藤…企業と企業が一体感を持って1つのプロジェクトに参加しなければいけないようなチーム作りが、これから当たり前になっていきますね。

佐々木…業務とソフトウェアの距離がますます近づいていますので、システムを運用しながら柔軟かつ迅速に、ソフトウェア自体をより良い方向へデザインしていくことが日常的になってくると思います。お客様と一体となってどう社会を支え、お客様に対してどのような役割でサポートするかを再設計していく時代になってくると思います。今はクラウド自体がどんどんアップグレードが当たり前になると、システムの運用と隣合わせでお客様に寄り添っていく必要がありますね。今はいろいろな意味で転換期にありますから、この転換期を一緒に楽しみましょう(笑)。

安藤…ぜひよろしく願っています。では、最後にプライベートなことをお聞きたいと思います。ご多忙な毎日だと思いますが、どのようにリフレッシュされていますか。

うにしていければいいなと思います。

転換期を楽しみ 一緒に役割を考えたい

安藤…グローバルの視点から見られて、国内のわれわれパートナー企業に対するこれからの期待は何かございますか。

佐々木…先ほどの生成AIの話に戻りますが、これから2〜3年経つと、当社の社員の役割やパートナー企業の皆様の役割がガラッと変わる可能性があります。パートナー企業の皆様とは、そこを先んじて洞察力を持つて一緒に考えていきたいと思っています。また、「ソフトウェア・デファインド」になって、作るべきソフトウェアの範囲はますます広がっていきますので、そこに対してどのように対応していくかも先んじて考えていく必要があると思います。

またエンジニアの育成においてもどのような役割を担うべきなのか。特に、人がやっていたことに生成AIが取って代わる領域が増えていくわけですが、一方では人も残らないといけない。そのためには、生成AIに置き換えるべきタスクと人がやるべきタスクを整理する必要があります。その上で、企業のプロセスや社会全体をどうデザインしていくのかといったところで、価値を提供していきたいですね。一方でそれ

佐々木…40歳くらいのときだったと思いますが、土日に仕事の話を思い出すようになった時期があり、このままだとまずいなと思いテニススクールに通い始めました。テニスは学生時代にやっていましたし、ゴルフ以上に汗をかきますからね。

土曜日にゴルフをして日曜日の午前中にテニスをして、午後に食材の買い物に行つて、夜に料理をするというのが休日のだいたいのサイクルです。なぜ料理をするかというと、自分が食べたいものを食べたいわけです。買い物前に冷蔵庫にある材料からその日の献立を考えてレシピを調べ、家族分の材料を考えながら買うものを頭の中でリスト化し、漏れなく買ってくる。いろいろ考えながら買い物に行くのは、結構老化防止になりますし楽しいですよ。お勧めします(笑)。

安藤…仕事以外のことを考えることがリフレッシュになっていっているんですね。本日はありがとうございます。

※1 Gartner社レポート「Gartner, Market Share: Services, Worldwide, 2024, Nena Sethi et al., 11 April 2025, Vendor Revenue Basis, 1149161111」

※2 ChatGPTは、OpenAI社の登録商標または商標です。

特別企画

ブレイクタイム

BREAK TIME



いま、社会が、ビジネスが、生活が、私たちを取り巻く環境が、日々刻々と急激に変化しています。その変化のスピードは凄まじく、時として自分の立ち位置がわからなくなることがあるのではないのでしょうか。そうした時代に生きる私たちの「いま」と「これから」を考える」をテーマにした特別企画「ブレイクタイム」。

仕事や勉強の合間にお読みください。

江戸湾をめぐる戦国絵巻

～海城にいざ、出陣！～

山城ガールむつみ氏



【執筆者プロフィール】



山城ガール
むつみ

歴史&山城ナビゲーターとして、歴史や城をテーマにしたイベントや講座、ツアーを多数開催。地域活性のため、埋もれている歴史掘り起こし等、歴史コンサルとしても活動し、御城印デザインやプロデュースも手がける。各地の行政とのタイアップ企画多数。

現在、多くの船舶が行き交う水上交通の大動脈である東京湾（かつての江戸湾）は、関東を代表する戦国大名北条氏と里見氏が激突した口マンあふれる歴史舞台です。三浦半島の観音崎と房総半島の富津岬の距離はたった7kmほど。まさに指呼の距離で、制海権をめぐる戦いが繰り広げられたのです。

北条氏は小田原城を本城に、相模、伊豆、武蔵、上野などに勢力を拡大。里見氏は、白浜城（南房総市）、岡本城（南房総市）、館山城（館山市）、稲村城（館山市）、金谷城（富津市）、佐貫城（富津市）などを本城として、安房、上総を領していました。両者は、諸勢力が入り乱れて戦った戦国時代のやこしい歴史背景の中で、対立を深め、江戸湾を挟んで何度も何度も戦いを繰り広げました。

里見氏は、北条氏の領地三浦半島へ進撃。三浦半島の突端にある城ヶ島（三浦市）に攻め込み、上陸して占拠しました。さらに、里見氏は鎌倉へも侵攻し、鶴岡八幡宮や周辺の寺社を焼き払いました。JR大船駅（鎌倉市）近くでも両者の大規模な合戦があったといい、今でもその戦いの戦死者を弔ったと伝わる首塚が残っています。

一方、北条氏も房総半島に上陸して、里見領内に侵攻。蔵波城（袖ヶ浦市）の沖合では里見水軍、北条水軍が海戦を行ったという記録

が残し、その戦闘によって、蔵波城下の寺の鐘が北条軍によって略奪され、戦利品として金利谷（横浜市金沢区）に持っていかれたといわれています。また、1567年には、三船山（君津市・富津市）で「三船山合戦」と呼ばれる戦いが勃発。これは、三船山に陣を置き、さらなる侵攻を目論む北条氏を里見方が撃退した戦いです。三船山の陣所を里見氏に急襲された北条氏は総崩れとなり、海を渡り、必死に三浦半島に引き上げるも、里見軍はさらにそれを追撃。三浦半島の沖合で戦いになり、北条氏はかなりの戦死者を出しながら、なんとか撤退したといえます。このように戦国時代には、江戸湾を挟んで、戦国絵巻さながらの戦いが繰り広げられたのです。歴史に思いを馳せ、海を眺めていると、まるで戦国時代の船舶が目の前に浮かぶようです。

このような緊迫した状況の中、北条氏と里見氏は互いにたくさんの城を築き、敵の来襲に備えました。城の中でも、沿岸部に築かれた城を「海城」と呼びます。海城は海に面して築かれ、船着き場を設け、湊を管理し、水軍の拠点となりました。また、海城は海だけでなく、河口部に築くことによって、下流から上流まで、河川を管理する役目も担っていました。

江戸湾周辺に築かれた海城の中でも、特に歴史を体感できるのが金谷城です。（現在、金谷城跡は、TJKリゾート金谷城という宿泊施設になっていて、宿泊者しか立ち入ることができません。）里見氏の重要な水軍拠点だった金谷城は、1555年に北条氏に攻め込まれて焼かれるなど、激しい戦いを物語る城です。金谷城からは、眼下を通る船が一望でき、対岸の三浦半島が驚くほど近く、鮮明に見えます。金谷城から海を眺めていると、ここから北条水軍を見張り、船を漕ぎ出し出撃した当時の光景が容易に想像できてワクワクします。

今は、城域の大部分が宿泊施設になっている金谷城ですが、眼をこらせば、戦国時代の城の

海の要塞 金谷城



金谷城プロムナード ～戦国薫る歴史のこみち～

遊歩道が整備されているので、散策を楽しむことができます。

一般の方向け限定公開日：2025年10月23日(木)
詳細は富津市観光協会の観光サイト「たび旅 富津」で！



※普段、一般の方は立ち入ることができません。

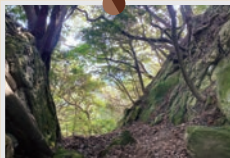
二の丸から出土した門跡

里見氏の城に相応しい格式の高い門があったと考えられています。4本の柱が出土した跡には、目印の石が置かれています。



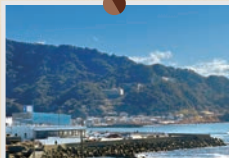
侵入を防ぐための 仕掛け「堀切」

岩盤を掘って、守りを固めた様子が見て取れます。



金谷城遠景

東京湾フェリー金谷港から見える金谷城の城山。宿泊棟をはじめとした建物が、金谷城のひな段状の平場を利用して建てられているのがよく分かります。



江戸湾を駆け抜けた海賊たち

戦国時代の戦いにおける現場の主役は「海賊」でした。「海賊」というと、映画や小説でも話題になった瀬戸内海を行き交う村上水軍、紀伊半島に跋扈した熊野水軍や九鬼水軍、はたまた、「パイレーツ・オブ・カリビアン」のようなカリブ海の海賊をイメージするかもしれません。海賊とは、平時は海に関わる水運業、漁師、流通商人などを生業とし、有事には治世者のもと、武器を持って戦った海の民です。「海賊」という「ならず者」のイメージがあるかもしれませんが、彼らは戦国大名のもと、統制の取れた水軍集団でした。戦国時代の江戸湾では、「海賊」たちが、縦横無尽に行き交い、大活躍したのです。



TJKのHPには、 金谷城の紹介と動画が掲載されています！

「関東屈指の海城！金谷城にいざ、出陣」
(TJK 東京都情報サービス産業健康保険組合)



※ 金谷城の遺構に関しては、通常立ち入り不可の箇所があります。

姿が現地に色濃く残っていて、手つかずに残る戦国時代の金谷城の姿を目の当たりにすると、一瞬で戦国時代にタイムスリップします。現在、宿泊棟が建っている場所は金谷城の二の丸にあり、発掘調査によると、複数の建物が建っていたことが分かっています。二の丸からは、岩盤を削り、切石を積んで造られた門跡が見つかっていて、発掘された柱穴の形状から四脚門が建てられていたとされ、現地に立つとますます想像が膨らみます。この門に続く尾根には、敵の侵入を防ぐために施された二重堀切がしっかりと残っていて、戦いの緊張感をビリビリ感じます。現在、二の丸の一番眺めが良い張り出し部分は、フォトスポット「幸せの鐘」になっていますが、この場所には、見張り用の「櫓」が建っていたようです。また、宿泊棟の裏山の山頂が本丸にあり、本丸の周囲には岩盤を削って敵を防いだ空堀が当時のまま残っています。テニスコートや駐車場になつている平場も、金谷城の曲輪を利用して造成されており、このように、気づけば戦国時代の金谷城の痕跡があちこちに残っているのです。

江戸湾には、古くは、ヤマトタケルの伝説も残ります。ヤマトタケル東征の際、妃のオトタチバナヒメは、荒ぶる海を鎮めるために海に身を投げ、自分を犠牲にして夫の進軍を助けたといい、この伝承からも、江戸湾を通る海の道がいつの時代も重要なルートであったことが分かります。また、幕末から近現代においても、江戸湾沿岸部には砲台、台場が置かれ、常に重要な場所であり続けました。金谷城の本丸にも、砲台跡が残っています。

今でもひっきりなしに船舶が行き交い、交通の大動脈である東京湾を眺めながら、この美しい景色に内包されている歴史に思いを馳せて楽しんでください。

※ TJKリゾート金谷城は、東京都情報サービス産業健康保険組合TJKの組合員専用の宿泊施設のため、宿泊者以外は敷地内に入ることができません。

「しっかりとしたモノ(システム)づくりと高品質のサービス」を掲げ、“選ばれる会社”を目指すアイエックスナレッジ（IKI）。この強気フレーズの裏付けは、他ならぬ人材にあります。そうした人材群をリードしてきた「IKIの現場の顔」トップ・エンジニア：今回の「わが社の匠」は、AWSを中心としたクラウド関連スキル習得にまい進するとともに、IKIのクラウドネイティブ人財育成、クラウド案件拡大をけん引する次世代の匠、秋山真太郎です。

（編集部／本文敬称略）

ITを通じて子どもの頃から好きだったモノづくりに携わろうと、業界の門をたたいた秋山。金融業界でシステム開発の経験を積んだ後、もっと新しい技術や開発手法にチャレンジしたいと自ら希望した異動がターニングポイントとなり、現在はIKIでただ一人、全てのAWS[※]資格を保有する技術者となった。急速に変化する環境の中で、学び続ける秋山が目指すフルスタックな技術者とは。

モノづくりへの思いを持って IT業界へ

子どもの頃からモノづくりが好きで、動くモノを自分で作りたいという思いが強かった秋山。商業科で簿記や情報処理を学んだ高校時代、IT企業に勤めていた7つ上の兄の影響でITに興味を持ち、高校卒業後、IT系の専門学校へ進んだ。その後も子どもの頃からの「動くモノを自分で作りたい」という思いは消えることなく、ITの世界でモノづくりに携わることを決め、IKIに入社した。

資格の勉強が 業務に直結する面白さ

これまで触れたことがなかったクラウド。異動後まず始めたのがAWSの自己学習だった。Webサイトや動画サイトで学んだ知識をもとに、社内のAWS研修環境に触れ、実践した。1〜2カ月ほどのそうした自己学習の後に担当したのが、AWSを利用した新たな社内システムの基盤環境の構築だった。この社内システムの構築がクラウド技術者としてのキャリアの始まりとなり、その後は、AWS技術者としてお客さまのプロジェクト案件に参画するようになった。

プロジェクトで実務経験を積みかたわら、学習の成果を測るためにAWSの資格に挑戦した秋山。学習する中で、資格のために学んだ知識が業務に直結することに気付き、学んだことを実務で発揮できる面白さを実感したという。すると、上級の資格や他のカテゴリの資格に対する興味が深まると同時に資格取得への意欲も高まり、AWSの認定資格をいろいろと受けるようになっていった。金融時代は業務に直結する技術資格が少なく、資格取得にあまり興味がなかったという秋山だが、今ではIKIでただ一人、全てのAWS資格を保有する「クラウドネイティブ人財」となった。

資格を取ることが 自信に繋がる

秋山が所属するDX・イノベーション室は、クラウド案件の獲得やクラウドネイティブ人

誰もがクラウドに対応できる 仕組みづくりを目指す

DX・イノベーション室

秋山 真太郎

あきやましんたろう



財の育成といったIKIのDX化対応を先頭に立つて推進する部署だ。その取り組みの一環として、クラウド技術者の育成カリキュラムを全社に展開しているが、その基を作ったのが秋山だ。クラウドを学習し始めた頃、参考にできる社内資料がなくスキル習得に非効率さを感じた経験から、自身の学習内容を体系化し、室長と相談しながら全社に提供できるカリキュラムに仕上げた。「学生時代からあまり目立つタイプではなかった」という秋山だが、異動後は積極的な提案や上司とのコミュニケーションを意識するようになった。「資格を持つことで社内外での発言力が上がった」と語るように、客観

異動で出会ったAWS

新人研修後に配属された金融系の事業部では、主に外為関係のシステム開発と保守に携わり、銀行業務を裏側から支えた。しかし、そうしたバックエンドで動くシステムは、銀行などを利用する一般のお客さまには直接見えない。銀行業務を円滑に運営するためには大切なシステムであることはもちろん理解していたが、秋山は次第に、「自分が開発したアプリケーションを、一般のお客さまが実際に使って喜ぶところが見たい」と思うようになったという。また、新しい技術や開発手法にも興味を持つようになり、それらに触れる機会を求めて新たな環境に挑戦したいとも思うようになっていった。

次のキャリアへ進むためにどうすればよいか悩んでいるとき、自身が所属している社内の将棋部の先輩が「いい部署があるよと、当時クラウドやジャイル開発に力を入れていた部署を紹介してくれた。入社から6年目、その部署への異動が秋山とAWSの出会いに繋がった。

フルスタックな 技術者を目指す

自身のスキルアップに励む一方で、現在はグループマネージャーとしてチームマネジメントやクラウド案件の拡大にも奔走している秋山。特に注力しているのが社内システムを活用したナレッジの共有だ。

秋山の配下メンバーはお客さま企業に常駐してクラウド案件に携わることが多いため、そこで得た知見はメンバーひとり一人のノウハウにはなるものの社内には残りにくい。この課題に対して秋山は、プロジェクトの現場で得たクラウドの知見を集約し、社内共通のナレッジとして活用できる仕組みづくりを進めている。さらに、クラウドに関するIKI標準の確立にも取り組み、誰もがクラウドに対応できるようにすることでクラウド案件への対応力強化を目指している。

こういった取り組みを進める中で、「インフラだけでなくアプリケーションも分ける技術者、さらにはビジネス面や経営的視点を持つフルスタックな技術者を目指したい」と語る秋山。急速に変化する環境の中で学び続ける力を武器に成長していく次世代の匠が、これからのIKIを引っ張っていくことを期待している。

※1 Amazon Web ServicesおよびAWSは、米国およびその他の諸国におけるAmazon.com, Inc.またはその関連会社の商標です。

世代を超えた交流と心地よい居場所を提供する



2011年にスタートしたIKIの社会貢献活動「ロボット&プログラム体験教室」を、2012年以降、コロナ禍での中断を挟みながらも毎年継続的に開催している港区立芝浦アイランド児童高齢者交流プラザ（通称あいぶら）。今年も同施設で通算11回目となる教室を8月8日に開催させていただきました。今回はその“あいぶら”を運営する公益財団法人東京YMCAの丸岡 航大さんと、竹本 敦哉さんに「あいぶら」のことや今回初めて参加し、サポートいただいた「ロボット&プログラム体験教室」について、お話を伺いました。

公益財団法人東京YMCA
(港区立芝浦アイランド児童高齢者交流プラザ)
竹本 敦哉さん(写真左)
丸岡 航大さん(写真右)

どの年代にも心地よい居場所

「まず、「港区立芝浦アイランド児童高齢者交流プラザ（通称あいぶら）」はどのような施設か聞かせてください。

丸岡「『あいぶら』は2007年に開設された港区の施設で、芝浦アイランド児童高齢者交流プラザという名のとおり、0〜18歳までの子どもたち及びその保護者、60歳以上の高齢者が利用できます。中には児童館に加え、学童クラブも併設されていますので、特に平日の放課後や小学校の長期休業期間中はたくさんの小学生が利用しています。日々、乳幼児や小中高生、高齢者向けのプログラムを行っていますし、各年代と一緒に活動できる交流プログラムも実施しているので世代間交流もできる施設になっています。1日の訪問者数は100名以上いらっしゃると思います。また、地域のお祭りなどのイベントにも参加し、地域社会とも繋がりが深い施設です。現在は、私も公益財団法人東京YMCA（以下、東京YMCA）が港区からの委託を受けた指定管理者として「あいぶら」を運営しています。竹本・丸岡が説明したとおり、「あいぶら」は子どもから高齢者までが利用する施設ですが、どの年代の方にも心地よい居場所になれるといいのかなと思っています。いつ来ても帰ってもよくて、高齢者の方々も含めて皆さんがお互いに思いやりを持って気持ちよく過ごせる居場所になればいいなという思いで日々取り組んでいます。

「あいぶら」では各世代に向けていろいろ

が一番じっくりくるなあと感じています（笑）。

当たり前となってきたロボット

「8月8日に行った弊社「ロボット&プログラム体験教室」についてお聞きしたいと思います。準備の段階からいろいろとお世話になりましたが、初めて参加されていたいかがでしたか。

丸岡「導入の部分で『どんなロボットがあると思う?』と子どもたちに聞いたときに、私はもっといういろ出てくるのかなと思ったのですが、なかなか出てこなくて助け舟を出しました。後々振り返ると、『今、子どもたちの周りにはロボットが当たり前にあらずぎて、それらをロボットだと意識していない

るなイベントが行われているということですが、具体的にはどのようなことをされていますか。

丸岡「まずは私たちスタッフが展開するプログラムがあります。例えば工作をしたりドッジボールをしたりしています。毎月開催しているボードゲームの大会は、館内に結果を貼り出しています。さらに、『あいぶら』から飛び出して近隣の公園に遊びに行ってみようというプログラムもありますし、ときには外部から講師を招いて行うプログラムもあります。例えば陶芸教室を年に4回くらい実施しています。近くにある施設との交流もあり、ドッジボールやフットサルの大会、eスポーツの大会もしています。『あいぶら』はこのような交流の拠点となっています。

縦でも横でもない斜めの関係

「あいぶら」でお2人が担当されている業務についてお聞かせください。

丸岡「竹本も私も主に児童館を担当しています。対象は小中学生から高校生までで、プログラムを企画して実行しています。また、体育室を日々遊べるような形で運営したり、その他の部屋の管理もしたりしています。竹本：私たちは学校の先生ではないので、指導というよりは『見守り』という形ですね。丸岡「例えば工作であれば、どのような工作をするかを企画したり、材料を揃えたりして、『参加しませんか?』という準備や子どもたちに合わせた提案を行っています。子どもたちが来たら『こうやってやるんだよ。一

緒にやってみよう』という形で進めていきます。ですから、子どもたちが『あいぶら』に来て楽しく遊ぶための存在です。乳幼児や高齢者の方を対象とする部門でも、『あいぶら』のスタッフは全員がそのような気持ちでやっていると思います。

「あいぶら」ではスタッフの皆さんがニックネームで呼び合っていますね。それは何か理由がありますか。

竹本「先ほど『指導』ではなく『見守り』という形であるとお話ししましたが、私たちは学校の先生ではないですし、親御さんでもありません。でも、大人ではあると。そのことを私たちは『斜めの関係』と言っています。それを示すために親しみやすくしようということで、呼びやすいニックネームをスタッフ全員が持っています。『このように呼んでね』と。それは『子どもたちも一緒だよ。お互いに呼んでほしい名前です。呼び合おうね』ということでニックネームが付いています。

お2人のニックネームは?（笑）

竹本「僕は『たけちゃん』と呼ばれています。丸岡は『まる』です。このあたりはヒネリがありませんね（笑）。

丸岡「もともと東京YMCAではボランティアでキャンプの引率をしていました。そのときにニックネームで呼び合うことがあって、東京YMCA全体でそれぞれがニックネームを持つことになりました。『あいぶら』の運営母体は東京YMCAなので、ほぼ全員にニックネームがあります。ニックネームは、自分でこう呼んでくださいという人もいますが、私は昔から『まる』と呼ばれていたので『まる』

IKIのロボット&プログラム体験教室

教育用プログラミングソフトと車型ロボットキットを用いて、小学高学年を対象に、以下の内容に沿って3時間で行う体験教室。

- (1) 思い浮かぶロボットをイメージし発表する
- (2) ロボットキットを組み立てる
- (3) パソコンでプログラムを作りロボットを動かす
 - ・練習プログラム
 - ・自由にプログラム
 - ・楕円コースを周回するプログラム
 - ・楕円コースを1周するのにかかる時間をプログラムを工夫して40秒に近づけるレース



車型ロボット RCX

んじゃないかな？」と思いました。今の子どもたちはロボットを特別なものとは思っていない。ただ普通にあるものとして思っているんだなと。

——車型ロボットキットを組み立てる子どもたちの様子はいかがでしたか。

丸岡…組み立て自体はスムーズだったと思います。最後にチーム名を決めたところもすごく楽しそうでした（笑）。子どもらしくワイワイしている感じが印象的でしたな。

——パソコン操作やプログラミングのあたりは見ていけるかでしたでしょうか。

竹本…タブレット世代の子ともたかなのでマウスの操作はどうかかな？と思っていたのですが、ドラッグ&ドロップは「分かったぞ！」となつてからは簡単にできていました。あとは、間違つたプログラムを作ってしまったら画面上のアイコンをマウスで囲んで、デリートボタンを押せば間違いが消えるというのは単純ですがよく分かりやすそうでしたな。

丸岡…ロボットとパソコンの画面上で作っ



「あいぶら」ロボット&プログラム体験教室開催実績

開催年	参加人数
2012年	18名
2013年	16名
2014年	12名
2015年	16名
2016年	8名
2018年	13名
2019年	6名
2022年	8名
2023年	5名
2024年	6名
2025年	7名
のべ参加人数	115名

たプログラムがどうリンクしているのかを理解するまでにちよつと時間がかつたように感じます。ロボットは作れたけれども、このパソコン画面は何を意味しているんだろう？と。子どもたちの頭の中でそれらがリンクした瞬間に、「あつ。じゃあ、こうしてみよう！」ということが出てきていました。そこからはサポートする人たちと話をし、いろいろやっていけていましたね。プログラミングになじみのある子は即座にいろいろと作って独自に取り組んでいました。子どもたちが自分の頭で考え、分からないところはＩＫＲの皆さんにそれとなく手助けをしていただけたのがよかったと思いました。

ものづくりとプログラミングの楽しさを体験してもらう

——全体を通して子どもたちの様子はいかがでしたでしょうか。

竹本…自分でプログラミングをして転送したら、すぐにロボットが動くというところで、「自分がやったんだ！」という達成感が得られるようなイベントだったと思いますし、モチベーションも高くできたのかなと。3時間

の教室ということで、3年生の子どもなどは集中力や興味が続くかな？どうかかな？と思っていました。全くな問題なく集中できていました。

丸岡…子どもたちも教室が進むにつれて、どんどん楽しくなっている様子が見え、子どもたちも伝わってきました。子どもたちが主体的にいろいろ考えて、自分のやってみたいことが叶えられたイベントだなと思いました。

——今後に向けて企業とのコラボなどについてはどうにお考えですか。

丸岡…今回のようにＩＫＲさんのような企業と一緒に取り組めるイベントが1年に1回だけではもったいないなと思っています。もちろんＩＫＲさんのご都合もありますし、私たちも指定管理者という立場で運営していてもさまざまな制約もあります。けれども、毎年実施している「あいぶらまつり」やハロウィンイベントなどでも、「ロボット&プログラム体験教室」とはまた別の関わりができれば、お互いにより深い関係性を築けるのではないかと思います。

竹本…今回の体験で子どもたちはプログラミングに興味を持ってくれたと思うので、参加したうちの1人でも、例えば将来プログラミングに携わる子が出てきたらいいなと思いました。また、「ロボット&プログラム体験教室」が、運動はちよつと苦手という子どもが自信を持つきっかけになってくれたらいいなと思います。

——今後の弊社の活動にぜひ参考にさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。

社外監査役

岡見 吉規

COLUMN

7万年のものさし

皆 さん、日々時間に追われていると思いますが、ちよつと長い「ものさし」

の話を紹介したいと思います。年縞という言葉を知っていますか？私もつい最近福井県の福井県年縞博物館を訪問して初めて知りました。ここには世界一長い45mの水月湖の年縞があります。年縞とは一年に一枚ずつ積み重なったシマシマ模様の地層のことです。水月湖では春から秋、晩秋から冬と積み重なるものに違いがあります。その違いにより木の年輪と同じく地層にシマシマ模様ができます。一年に積み重なる地層は0.6mm程度、45mは7万年分に相当します。福井県年縞博物館にはこの45mの地層がギャラリーとして展示されています。ぜひ、訪問またはWebサイト(<https://varve-museum.pref.fukui.jp/>)をく覧ください。

年 縞は地質年代の「ものさし」です。

おそらく皆さんは年代の測定方法と聞くと放射性炭素年代測定法を思い浮かべると思います。この測定法もその時代の状況などによりズレが発生し

ます。年縞はそれを補正して正しい年代を調べるために使われます。また、年縞に含まれる花粉を調べてどんな植物が生えていたか分かります。その時代の景色・気候など過去の「できごと」の記録でもあります。

この博物館では、2万年前は現在より気温が10度低い、7千年前には縄文海進[※]で、海面は現在より2〜3m高く、気温・水温は今より高かったと推定されています。毎年異常に暑くなることを経験している現在、ちよつと想像できないですけど。日々の時間とはちよつとかけ離れた話ですが、この研究は「宇宙と気候のつながり」「花粉情報の分析」「人と自然との関係」に役立つ研究です。

私

たちの環境も変化しています。生成AI、ローコード、ノーコードなど技術的に日々進化するもの、SDGsの流れの中、サステナビリティなど少し長い時間での対応が必要なものにも注力する必要があります。我々企業においても非財務事項も事業目標に加え、戦略的に非

財務事項に取り組んでいきます。ぜひ、皆さんもこれまでとは違った目で戦略、目標、業務を見直してはいかがでしょうか？

※縄文時代前期(約6,000〜7,000年前)に、地球の温暖化によって海面が上昇し、陸地が海に浸水した現象



福井県年縞博物館

Webサイトはこちら

